
渡辺始興と木村探元 - 二人の近衛家御用絵師の作画活動をめぐって -

早稲田大学 齊藤 全人

本発表では、根津美術館所蔵の「木蓮棕櫚図屏風」(以下、本屏風)をめぐる考察を行う。本屏風は棕櫚・芭蕉・木蓮の3点で構成された珍しい花木図である。「方祝」朱文円印が捺されていることから、その筆者は乾山に「方祝」印の使用を認められたという立林何*(ゲイ)と目されてきた。ただし、本屏風に捺された印と何*(ゲイ)画に捺された印とは別印であるという指摘もあり、疑問が残る。発表者は、本屏風を読み解くためのキーパーソンとして、渡辺始興と木村探元に着目する。

渡辺始興(1683～1755)は、五摂家のひとつ近衛家に入入りして画業に就いた京都の絵師である。その画風は幅広く、狩野派風、雪舟風、宗達派風、光琳風など様々な様式を使い分けている。また始興の描く草花図に顕著なのが、珍しい植物を積極的に描き込もうとする意志である。これは始興の仕えた近衛家熙が、博物学的関心の高い人物であったことと深く関係していると考えられている。そうした中で始興は、興味深いことに本屏風と図様の酷似した作品を遺している。大正7年6月の近衛公爵御蔵器第1回入札に出品された対幅形式の「木蓮棕櫚図」である。現在の所蔵先は残念ながら不明だが、家熙の曾孫経熙による箱書きが附属していたという。本屏風と近衛家旧蔵の始興筆「木蓮棕櫚図」は主要モチーフを棕櫚と木蓮とする点が共通するだけでなく、それらのモチーフの形から描法までほぼ一致する。この始興画との看過できない類似性が、本屏風を考える上でまずひとつ押さえておかなければならない点である。

一方、木村探元(1679～1767)は薩摩の絵師でありながら、享保19年(1734)家熙の子家久に招聘される形で上京し、半年間ほど京都に滞在した。その間近衛家のもとで言わば期間限定の御抱絵師として作画御用をつとめており、ここで始興とも接触をしている。『京都日記(上京日記)』、『三暁庵隨筆』の記述によると、この京都滞在中、探元は禁裏に献上する衝立に、黒棕(クロツグ)という棕櫚に似た南国の植物と木瓜を描いている。この衝立のモチーフの組み合わせ方は本屏風と相通じるものである。

これらを総合すると、始興、探元という近衛家関係の絵師と本屏風には少なからぬ接点が窺え、本屏風が近衛家の文化圏内で制作されたという推察が成り立つ。近衛家において来客に披露された、近衛家から家礼などに下賜された、または近衛家を通じて絵師に注文がなされた、いずれの場合にしても本屏風には近衛家の対外的なメッセージが含まれていたと考えるべきである。筆法、彩色、構図、技法などの詳細な分析を通して本屏風の真の筆者に迫りながら、この絵に込められた近衛家の意図を明らかにすることを目的とする。